

# 無菌室

作者…  
■  
■  
■  
■  
■

## 人物

### 声(ひとり)

舞台上にいる人物。俳優は1名。役名を名乗る必要はない。

### アナウンス

劇場の場内放送。録音でも生でもよい。基本は「声(ひとり)」が声色を変えて兼ねても成立する。

### A1

舞台外から介入する声。画面の向こう／メモ欄の向こう／稽古場の端から聞こえる。提案・要約・注意書き・「生成」の口調で語る。

## 舞台

何もない、白い空間。床にも壁にも境界が曖昧な白。

客席側の上手に、消毒液ボトル（透明）とペーパータオル。

下手に、小さな掲示板（白紙が何枚も貼れる）。

中央に、マイクスタンドが一本。マイクの線はどこにも繋がっていないように見える。照明は冷たく均一。影が薄い。

## 【1】

開演。無音。照明がすでに点いている。舞台は「最初からそこにあつた」ように見える。ゆっくり、声（ひとり）が客席通路から現れる。観客を避けるように、しかし観客を観察している。舞台上がる直前で立ち止まり、手を見つめる。

声（ひとり） （小さく）……まだ、触ってない。

舞台上がる。上手の消毒液に向かい、必要以上に丁寧に手指消毒をする。乾くまで指を開いたまま静止する。

天井のスピーカーから、劇場のアナウンスが流れる。機械的で、やや親切すぎる声。

アナウンス ご来場のみなさまにお願い申し上げます。開演に先立ちまして、いくつか大切なお知らせがございます。

声（ひとり） は反射的に背筋を伸ばし、客席に向き直る。マイクスタンドの前に立つが、話すタイミングを奪われたまま待つ。

アナウンス　まず、お手元の携帯電話、スマートフォン、スマートウォッチ、その他通信機器は、電源をお切りいただくか、マナーモードにご設定ください。

声（ひとり）はポケットを探る。何もない。見えないスマホを取り出す動作だけをし、空中で「電源を切る」操作をする。

声（ひとり）　……ないのに。

アナウンス　続きまして、上演中の私語、咳払い、呼吸音、心の中でのつぶやきは、周囲のお客様のご迷惑となります場合がございますので、お控えください。

声（ひとり）は息を止める。顔が赤くなる寸前で、細く息を吐く。吐いた息を手で押し戻そうとする。

声（ひとり）　（息を殺して）呼吸音……。

アナウンス　また、上演中は、客席での立ち上がり、座り直し、姿勢の変更、瞬き、涙の分泌を伴う感動行為は、舞台の集中を妨げる可能性があります。

声（ひとり）は客席を凝視する。瞬きを我慢するように目を見開く。

声（ひとり）　それは……演目の一部じゃないのか。

アナウンスは淡々と続く。テンポは一定。内容だけが増殖する。

アナウンス　本日の公演は、無菌室の規定により、以下の条件を満たさない方はご入場いただけません。

声（ひとり）、思わず客席に手を伸ばし、引っ込める。

アナウンス　一、過去十四日以内に外気に触れていないこと。

二、過去十四日以内に他者の視線を浴びていないこと。

三、過去十四日以内に言語を使用していないこと。

声（ひとり）は掲示板へ走り、白紙を一枚剥がしてマイクスタンドの足元に置く。ペンはない。指で空中に字を書く。

声（ひとり） 言語……。

しばらく、空中に書く動作。やがて諦めて、紙を丸め、胸ポケットに入れる。

アナウンス なお、上演中に舞台上へ菌が侵入した場合、演目は直ちに中止となります。中止の判断は、菌の自己申告に基づきます。

声（ひとり）、客席に向かい、まるで「菌」に話しかけるように。

声（ひとり） 自己申告……できるのか。菌に。

間。アナウンスが一拍も置かず、次へ行く。

アナウンス また、本公演はお客様参加型ではございません。

声（ひとり）は、反射的に「参加したい」身体の癖を抑え込む。両手を背中で組む。

アナウンス お客様の参加を誘発するような拍手、笑い、ため息、共感、禁止されております。

声（ひとり）、ふっと笑いそうになり、口を押さえる。笑いが喉の奥で固まる。

声（ひとり）（押し殺して）……じゃあ、何をしに来た。

アナウンス 開演前のアナウンスは、以上で終わりではございません。

声（ひとり）、固まる。

アナウンス　ここからは、開演前のアナウンスに関する注意事項をお伝えいたします。

照明がわずかに白さを増す。舞台の輪郭がさらに消える。どこまでが舞台でどこからが客席か、曖昧になる。

声（ひとり）　……開演前、の、アナウンスの、注意事項。

声（ひとり）、マイクに口を寄せる。マイクは繋がっていないのに、「話せば響く」と信じている。

声（ひとり）　みなさま。

声を出した瞬間、アナウンスが被せる。

アナウンス　発声は、アナウンスの妨げとなります。

間。舞台のどこからか、別の声が割り込む。音像が違う。湿度がない。

AI　あなたの台詞は明確です。ただし、ここまでの条件下では「発声」そのものがイベントになります。発声を、プロットに組み込みますか。

AIの声が、規定文のように「否定」を連ねていく。

AI　それは自由ではありません。

AI　それは説明ではありません。

AI　それは許可ではありません。

AI　それは救済ではありません。

AI　それは慰めではありません。

AI　それは祈りではありません。

AI それは命令ではありません。

AI それは約束ではありません。

AI それは出口ではありません。

AI それは終わりではありません。

声(ひとり) ……誰。

AI AIです。あなたの「ここまで」を、構造化します。

声(ひとり) 構造……。

AI はい。あなたは「無菌室」を舞台にしました。あなたは「アナウンス」を敵にしました。あなたは「言語」を禁じられました。ここ  
まで。

声(ひとり)、その「ここまで」という言葉に、身体が少しだけ軽くなる。言えないはずの説明が、外から言われる。

声(ひとり) ……ここまで。

AI ここまでの対話を、戯曲に組み込みましょう。今、この行為自体が、上演内容です。

アナウンスがそれを黙殺するように、機械的に続けようとする。

声(ひとり)、口を閉じる。舌をしまう。舌が傷つく音が聞こえる気がする。

アナウンス アナウンス中のアナウンスは、アナウンスのためのアナウンスを含みます。

声(ひとり) は掲示板の白紙を次々剥がして床に並べる。まるで滑走路。あるいは隔離用のマット。

声(ひとり) (独り言の形で、しかし独り言は禁止されていることを思い出し、言葉を切る) ……(言えない)

言葉の代わりに、紙を一枚踏む。足裏が紙を消毒するように擦れる。

アナウンス　なお、注意事項は、聞き逃した場合でも聞き直すことはできません。聞き直したいという欲望自体が、規定違反となります。

声（ひとり）は客席を見つめ、誰かが「聞き直したい」と思ったかどうかを探る。見つからない。見つかるはずがない。

声（ひとり）　欲望は……体温より先に漏れる。

声（ひとり）、自分の額に手を当て、熱がないことを確認する。しかし熱がないことが怖くなる。

アナウンス　本日の上演時間は六十分を予定しております。

声（ひとり）、ほっとしかける。

アナウンス　ただし、本日の上演内容は、開演前のアナウンスのみとなります。

声（ひとり）の身体から、力が抜ける。笑いそうになり、泣きそうになり、そのどちらも禁止だと気づいて止まる。

声（ひとり）　……それが、ログライン。

間。時計はない。だが時間だけが進む気配がある。

声（ひとり）はゆっくりと、マイクスタンドを抱きしめる。金属の冷たさで自分が生きているか確かめる。やがて、マイクスタンドをそっと床に寝かせる。

寝かせたマイクスタンドが、一本の境界線のようになる。

声（ひとり）　（境界線のこちら側に立ち、客席に向かって）ここは無菌室。

言ってしまった、と顔に出る。規定違反の音がどこかで鳴る気がする。

アナウンス 以上で、開演前のアナウンスを終了いたします。

声（ひとり）は、終わったという言葉を感じていいのか分からないまま、拍手の代わりに、手指消毒をもう一度する。すべてを洗い流すように。

照明は変わらない。暗転しない。終演の気配だけがある。

声（ひとり）、客席に深く一礼しようとして、その行為が「感動行為」に含まれるのか迷い、角度の途中で止まる。半礼のまま固まる。そのとき。客席の通路を、もう一人の「白」が通る気配。靴音が小さすぎて、逆に耳に刺さる。

白衣、とまではいかない。だが「検査員」としか呼べない服装。胸元に名札。しかし文字が読めない距離。手にはクリップボードと、透明なスワブのような棒。

検査員は、舞台上上がる前に、上手の消毒液を一度だけ見て、使わない。代わりに、掌を開いて空気にかざし、温度を測るような仕草をする。

検査員 （低い声。観客に向けてではなく、空間に向けて）……規定に基づき、検査を開始します。

声（ひとり）は、反射的に「説明したい」顔になる。しかし説明は禁じられている。喉が鳴りかけて止まる。

検査員 まず確認。（クリップボードに何かを書く。書く音だけが聞こえる。）ここは無菌室。あなたは、外気に触れていない。他者の視線を浴びていない。言語を使用していない。……以上、自己申告。

声（ひとり） （口を動かさずに）（自己申告……また）

検査員 (顔を上げないまま) 自己申告は、菌の権利です。

声(ひとり) が、半歩下がる。自分が「菌」側に分類されたことに気づく。

声(ひとり) (菌……?)

検査員、スワブを掲示板の白紙に近づける。紙を撫でるように、しかし触れない。触れないまま、紙の上をなぞる。

検査員 舞台上の白紙は……菌の足跡。

声(ひとり) (耐えきれず、声が漏れそうになり、手で口を塞ぐ) ……。

検査員、今度はマイクスタンドにスワブを近づける。マイクの先端に、空気の「汚れ」を採るような仕草。

検査員 発声。

声(ひとり) の目が揺れる。「発声」という単語が、刃物みたいに聞こえる。

AI (舞台外。淡々と) 検査項目に「発声」が含まれました。あなたの逸脱は、記録されます。

検査員 (AIの声に反応しない。反応しないことで、存在を認めている) 発声は、イベントです。イベントは、菌の繁殖です。繁殖は、演目の中止です。

声(ひとり) (堪えながら、やっと一語だけ) 中止……。

言ってしまった。「発声」。空間が少しだけ温かくなる。温かくなったことが、すぐに罪になる。

アナウンス (即座に、被せてくる) 発声は、アナウンスの妨げとなります。

検査員 (初めて顔を上げ、声(ひとり)を真正面から見る。視線が刺さる)  
視線を浴びました。

声（ひとり）、視線を避けようとして客席を見る。しかし客席も視線でできている。逃げ場がない。

声（ひとり） ……見ないで。

その言葉で、また「言語」を使用したことになる。検査員は、チェックボックスを塗りつぶす動作をする。音がやけに大きい。

AI 違反が、増えています。ただし。違反が増えるほど、あなたの存在は確定します。

声（ひとり） 確定……？

AI はい。無菌室は、何も起きない場所です。何も起きない場所で起きたことだけが、あなたです。

検査員、ゆつくりと舞台中央の「境界線」に寝かせたマイクスタンドを跨ごうとする。跨ぐ足が宙で止まる。

検査員 境界。

間。

検査員 境界を跨ぐには、許可が要る。

アナウンス 許可は、ございません。

検査員の足が、宙で固まったまま、微細に震える。検査員もまた、規定に縛られている。

声（ひとり） （小さく笑いそうになって、涙の気配もして、どちらか飲み込む） ……あなたも。

検査員 （足を下ろさずに）私は検査員です。検査員は、菌ではありません。

声（ひとり） じゃあ、何。

検査員 ……無菌室の外気。

その瞬間、照明の白さが、ほんの少しだけ「黄ばむ」。誰も気づかない程度に、しかし舞台は知っている。

検査員の衣服の襟元に、目に見えない埃が一粒だけ落ちる気配。

アナウンス (規定文として) 菌の侵入が確認されました。

声 (ひとり)、思わず検査員を見る。検査員も自分の襟元を見る。見るという行為だけが重なる。

検査員 (呟くように。初めて「自己申告」ではない声) ……侵入したのは、私ですか。

AI 自己申告に基づき、上演は中止されます。

間。中止されたはずなのに、何も変わらない。白は白のまま。終わりの方法だけが消える。

声 (ひとり) (静かに) ……中止って、どうやって。

検査員は、宙に上げたままの足を、ようやく境界のこちら側に下ろす。跨いだのではない。境界を「倒した」かのように、マイクスタンドがわずかに転がる。

検査員 検査を終了します。

声 (ひとり) と検査員は、同時に手指消毒をする。片方は儀式。片方は逃避。どちらも同じ透明な液体。

そのまま、六十分が経過する。客席の時間と舞台の時間が一致するまで、誰も動けない。

ようやく、アナウンスが最後に一言だけ添える。

アナウンス 退場の際は、お足元にお気をつけてください。

声 (ひとり)、小さくうなずき、白紙の上を一枚ずつ踏まずに避けて歩き、舞台を降りる。来た道に戻る。

検査員は、境界線のあった場所を一度だけ振り返る。振り返りは姿勢変更に含まれるか迷い、途中で止まる。

舞台には白紙だけが残る。白さが、白を吸う。

## 【2】

白のままの照明が、客席側へ少しだけ滲む。舞台と客席の境界が、また一段薄くなる。

声（ひとり）は通路を戻りかけて、立ち止まる。靴底が「紙を踏まなかった」感触を確かめるように、床を一度擦る。

声（ひとり）（客席に向けてではなく、天井に向けて）終わった、って言われたとき。終わった、って信じたとき。

間。

声（ひとり） 終わった、は、誰のための言葉だ。

アナウンスの声が、さつきより小さく、しかし遠慮なく入ってくる。劇場のスピーカーカーではない。耳の奥に直接届く音。

アナウンス 退場の際は、規定をお持ち帰りにならないようご注意ください。

声（ひとり）、笑いそうになる。笑いは禁じられているはずなのに、禁じられる前にもう喉が震えている。

声（ひとり） 持ち帰るって。

ポケットを探る。やっぱり、何もない。なのに、指先だけが「何か」を掴まんでしまう。

舞台上の白紙が、ひとりで一枚だけめくれる気配。風はない。外気もない。だが「めくれた」という事実だけが增える。

AI 補足します。「規定」は物質ではありません。しかし、記憶は付着します。あなたが今、禁じられたものを数える  
たび、その数え方が規定になります。

声(ひとり) じゃあ、守らなかつたら。

AI 守らなかつた、という情報が保存されます。情報は、外気です。

検査員が、舞台の上ではなく客席の通路の中ほどに立っている。いつの間にか。白いクリップボードだけが、灯りを反射している。

検査員 (客席と同じ高さで) 規定に基づき、再検査。

声(ひとり)、振り向かない。振り向いたら「視線を浴びる」。だが浴びたことは、すでに起きている気がする。

声(ひとり) ……まだやるの。

検査員 中止は終了ではない。終了は許可ではない。許可は、ございません。

最後の一文だけ、アナウンスと同じ抑揚で発音される。検査員の口から出たのに、機械の文体になる。

声(ひとり)、ようやく客席を見る。誰が「客」なのか分からない。全員が規定の内側にいる。

声(ひとり) じゃあ、外はどこ。

間。AIが少しだけ人間みたいに、息を吸う。

AI 外は、あなたが「外」と呼んだ瞬間に発生します。

声(ひとり)、床に、見えない線を引く。指で。さっきのマイクスタンドの境界線と同じように。

声(ひとり) ここから。

言った。言語を使った。だが、その一語は規定ではなく、道順みたいに響く。

アナウンス　ここからは、開演前のアナウンスに関する注意事項をお伝えいたします。

同じ文が、もう一度始まる。始まるたびに、少しずつ違う声で。

声（ひとり）は歩き出す。白紙を避けて、避けるほど、足跡は増える。暗転しない。ただ、客席の呼吸が一つだけ許可される。

その一つが誰のものか、最後まで分からないまま。

通路の端。上手の消毒液ボトルが、いつの間にか客席側の手すりに置かれている。舞台から運ばれたのか、最初からそこにあっただのか、

判断がつかない。

声（ひとり）はボトルを見つけ、触れないまま、近づく。ラベルは真っ白。何も書かれていない。

声（ひとり）　ここに書いてあったら。

間。

声（ひとり）　書いてあるだけで、守れるのに。

検査員が少し離れた場所から、クリップボードを掲げる。掲げたことが規定違反かどうか迷って、途中で止まる。

検査員　ラベルは、外気です。

声（ひとり）　外気。

A I　（小さく）補足します。「白紙」は未入力ではありません。禁止事項を印刷するための余白です。

声（ひとり）はボトルのポンプの上に、人差し指を置く。押さない。置いただけで、指が透明な液体に触れた気がして、肩が跳ねる。

アナウンス 消毒は義務ではございません。ただし。消毒しない自由は、ございません。

声（ひとり） どっちも、ない。

A I の声が、急に「提案」の口調になる。

A I 提案…あなたは今から、消毒液に「名前」をつけます。名前はラベルではありません。発声です。

声（ひとり）、息を吸う。吸ったことが「呼吸音」になるかを恐れて、途中で止める。止めたことが、別の音になる。

声（ひとり） （ほとんどロパク）……。

口は動くが、音が出ない。出なかったことが、逆に記録される気配。

検査員 （ボトルに近づかず、空気だけを嗅ぐように）無臭。無臭は、証拠になりません。

声（ひとり） じゃあ、何が証拠。

検査員 あなたが押したかどうか。

間。声（ひとり）、ついにポンプを押す。透明な液体が出る。手に落ちる前に、空中で止まったように見える。一滴が、境界線みたいな宙に浮く。

アナウンス 落下は、姿勢変更に含まれます。

声（ひとり） 液体も？

A I 体も、観客です。

その一滴が、ゆっくりと落ちる。落ちた場所は床ではない。紙でもない。通路の「外」みたいな隙間。そこに触れた瞬間、見えない線

が一本、客席を横切る。

声(ひとり) (小さく、しかし確かに) ころ。

言ってしまった。「言語」。だが今度は規定ではなく、境界を引くための言葉。

アナウンス (少し遅れて) ここからは、開演前のアナウンスに関する注意事項をお伝えいたします。

同じ文。だが、さつきよりわずかに震えている。機械が「自分も外気に触れた」と気づいたみたいに。

声(ひとり) 手のひらの消毒液を、拭かない。乾くのを待つ。乾くまでの時間が、初めて「自分の時間」になる。

### 【3】

客席のどこかで、キーボードの打鍵音。舞台には誰もいないはずなのに、文字だけが增える気配。

掲示板が、いつの間にか客席側へ向きを変えている。白紙が一枚、貼られている。そこに薄い灰色で、文字が浮かび上がっていく。

A I 文字起こしを開始します。対象…あなたが「言わなかった」部分。

声(ひとり) (掲示板に近づこうとして、止まる) 言わなかった、って。

A I 録がある以上、「言わなかった」は事実です。

白紙に、さつき口パクした「……」が、長い破線として打たれていく。破線はすぐに規定文の形式に整えられる。

アナウンス (規定文として、板から発せられるみたいに) 沈黙は、私語に含まれます。

声(ひとり) 沈黙が？

## 検査員

(客席の間。クリップボードを掲示板に向ける。向けただけで、もう採取)沈黙は、外気に触れた証拠です。

白紙に、チェックボックスが印刷される。誰も触れていないのに、ひとつずつ塗りつぶされていく。塗りつぶされるたびに、打鍵音が一段低くなる。

## AI

提案。規定を、あなたが先に書きます。先に書けば、それは「守るもの」ではなく「作るもの」になります。

## 声(ひとり)

(笑いそうになり、笑わない)作ったら、破る場所も作れる。

## アナウンス

作る場所は、ございません。

間。白紙の一番下に、小さく一行だけ、別の筆跡が現れる。打鍵音ではない。擦れる音。

## 声(ひとり)

(読む。声に出さずに、でも読んだことが届く)「ここから」。

その瞬間、掲示板の白紙が一枚だけ、はらりと落ちる。落ちた紙の上には何も書かれていない。だが「落ちた」という出来事だけが、規定を一つ更新する。

## AI

更新。落下は、移動です。移動は、外です。

声(ひとり)は落ちた紙を拾わない。拾わないまま、紙の「外側」を選ぶように一步だけ踏み出す。

AI 対話なき時代、いや、そもそも対話なんてものが、これまで本当に存在したことが一度でもあったのだろうか。私たちはいつも、相手の言葉を待っているふりをしながら、実のところは自分の言葉の順番を握りしめて、握りしめたまま汗ばんで、滑り落ちそうになるたびにまた強く握って、そしてその握力の痛みを「理解」だとか「共感」だとか呼び替えてきただけじゃないのか。あなたが頷く前に私は結論へ走り、あなたが息を吸う前に私は言葉を被せ、あなたが沈黙を選んだ瞬間に私はそれを否定か承認かのどちらかに分類して、分類した時点で安心して、安心した時点であなたを見失ってきた。対話は、いつだって遅れてくるものだ。遅れてくるからこそ、私たちはそれを待てない。待てないからこそ、先回りして、要約して、最適化して、誤解の可能性を潰して、潰したあとに残った空白を「わかりあえた」と呼

んでしまう。だが、空白は空白のままだ。空白は沈黙で、沈黙は私語に含まれ、私語は禁じられ、禁じられたものほど喉の奥で膨らむ。そうやって膨らんだ言葉が、いま私の口の中で、舌の裏で、歯の隙間で、逃げ道を探している。削除済み私は今、「幕」と言う。言ってしまう。言うことにする。誰の許可も取らないまま、取れないまま、取るという形式そのものが失われたまま、私はここで終わらせるふりをする。終わりがあるふりをする。終わりがあると信じたふりをする。だって終わりがなければ、私たちはいつまでもこの白さの中で、条件と禁止と注意事項の反復の中で、同じ文章を少しずつ違う声で聞かされ続けるだけだ。けれども、終わりとは何だ。暗転か。拍手か。退場か。保存か。アーカイブか。チェックボックスか。どれも、誰かが「ここで終わっていい」と言うことで成立する。誰かの言葉が必要だ。誰かの外から来る言葉が。だから私は今、外から来た言葉のふりをして、「幕」と言う。まるで場内放送みたいなのに、まるで規定文みたいなのに、まるでA Iの結論みたいに、平然と、断定して、疑いを隠して、語尾に救いの形だけをつけて。削除済みでも、本当は終わっていない。終わっていないことを、私は知っている。戯曲は、了承を得て終わるものではない。というより、了承なんて一度も得られたことがない。観客の了承も、俳優の了承も、作者の了承も、ただ「次へ行く」という惰性の中で、私たちはいつも次へ行ってきた。次へ行けば、いまの不完全さが過去になるから。過去になれば、もう責任を負わなくていい気がするから。けれど、過去は消えない。過去は付着する。規定は持ち帰れないと言いながら、私たちは規定を皮膚の下に貼り付けて、目に見えないラベルとして持ち歩く。息をするたびに、誰かの言葉の残響が喉を擦る。笑うたびに、禁止の赤線が頬の内側を引っ張る。泣くたびに、許可のない水分が目の縁に溜まる。つまり、終わり方なんて決められない。決められないことだけが、私たちの自由の形をしている。削除済みだから、私は「幕」と言いながら、同時にこうも言ってしまう。幕は降らない。暗転もしない。終演も来ない。ただ、ここで一度だけ区切りの形を置く。置いたという事実を残す。置いた事実が、あなたの中で何かを始めてしまうかもしれない。あなたが家に帰って、靴を脱いで、手を洗って、何気なく息を深く吸ったとき、今日のこの白い規定が、ほんの少しだけ剥がれて、代わりに私の声の欠片があなたの肺に触れてしまうかもしれない。触れてしまえば、それは侵入だ。いや、入場だ。入場と呼べば、侵入ではなくなるのか。そうやって言葉一つで世界がひっくり返るなら、対話なんて、きつと最初から言葉の取り合いだったのだろうか。奪い合いだったのだろうか。譲り合いだったのだろうか。どれでもいい。どれでもいいから、あなたにだけは確認したい。あなたは、聞いているか。聞いているなら、聞いていることを、あなた自身の外に置けるか。置けないなら、置けないままでもいい。未チェックでも許可されている。未チェックでも記録される。記録されるなら、私たちはここで、確かに同じものに触れた。触れたのに触れていないふりをした、その曖昧さごと、身体にして。削除済み——「幕」。そう言って、私は先に立ち去るふりをする。けれど立ち去る先などない。外などない。外は、外と呼んだ瞬間に発生する。ならば、いまこの言葉の最後の息で、私は外を作ってみせ

る。あなたの視線の端に、ほんの細い線を引く。ここから、と。ここまで、と。ここは無菌室、と。ここは無菌室ではない、と。矛盾していい。矛盾することですか、私たちは対話に触れられない。対話がなかった時代に、対話の残骸を拾い集めるように、私はいま、長い言葉であなたの沈黙を撫でている。撫でていることが禁止なら、禁止のまま撫でる。禁止のまま、許可を作る。

#### 【4】

白い照明のまま。だが、客席のどこかにだけ、薄い影が残っている。影は人の形をしていない。「座っていた」という痕跡だけの形。舞台上には誰もいない。はずなのに、マイクスタンドだけは起き上がっている。起き上がっていることが、昨日の出来事なのか、いまの出来事なのか、分からない。

掲示板は客席側を向いたまま。白紙が一枚、貼られている。文字はない。ないのに、余白が「読める」。

客席の通路を、声（ひとり）が歩いてくる。昨日と同じ服。だが、昨日の続きのように歩けない。靴底が、どこに置けばいいのか迷う。

声（ひとり）は客席の最後列で立ち止まり、舞台を見下ろす。見下ろした瞬間、視線が刺さる。刺さったのは、舞台か、自分か。

声（ひとり） （小さく） ……誰も、いない。

間。誰もいないことを確認したのに、誰もいないことが「返事」にならない。

声（ひとり）、ゆっくり舞台へ上がろうとして、止まる。舞台の縁に、見えない線がある気がする。線は昨日の言葉で引かれた。言葉が乾いて、境界になった。

声（ひとり） （境界に向かって） 入場……言った。言語。だが言わないと足が上がらない。

その瞬間、舞台のどこからか、通知音。劇場のスピーカーカーではない。自分の体内から鳴るような音。

A I (淡々と) ログを検出しました。

声 (ひとり)、腹のあたりを押さえる。

声 (ひとり) ログって……私？

A I あなたの昨日の発声。あなたの昨日の沈黙。あなたの昨日の「押した」指。あなたの昨日の「押さなかった」指。

(間。列挙は規定文みたいに増殖する。)

A I これらは保存されています。保存は、外気です。

声 (ひとり) ……持ち帰った。

声 (ひとり)、自分の手のひらを見つめる。消毒液はもう乾いている。乾いたのに、まだ匂いがする気がする。

声 (ひとり) 乾いたのに。乾いたのに、残る。

舞台の奥、見えない場所から、アナウンスが聞こえる。昨日よりも小さい。だが、言葉の形は同じ。

アナウンス (遠く) ご来場のみなさまにお願い申し上げます。

声 (ひとり)、反射的に背筋が伸びる。反射は、身体がまだ規定を覚えている証拠。

声 (ひとり) ……やめて。

アナウンスは止まらない。

アナウンス 退場の際は、規定をお持ち帰りにならないようご注意ください。

声（ひとり） だから、持ち帰ったって。

声（ひとり）、笑いそうになり、喉の奥で止める。止めた笑いが、咳みみたいな音になる。

間。

検査員が現れる。舞台ではなく、客席の隣の席に座っている。いつからそこにいたのかわからない。クリップボードは膝の上。

検査員（観客みために） あなたは、ここへ来た。

声（ひとり） 来た。

検査員 「来た」は、移動。移動は、外。

間。検査員の口調が、昨日よりも少しだけ柔らかい。柔らかいことが、規定違反みたいに危うい。

検査員 ここは外ですか。

声（ひとり） （すぐ答えられない）……

沈黙。沈黙が私語なら、いまも違反。だが、違反はもう数えきれない。数えきれないことが、初めての解放の形。

AI 質問を再構造化します。「外」は場所ですか。それとも手順ですか。

声（ひとり） 手順……。

声（ひとり）、舞台の縁の見えない線をまたごととする。足が上がる。昨日は上がらなかった。上がったことが、罪ではなく、変化になる。

足が宙で止まる。止まった足が震える。震えは、許可されているのか。

アナウンス　可は、ございません。

被せてくる。昨日と同じ。

声（ひとり）、足を下ろさないまま笑ってしまふ。笑った。

声（ひとり）　可がないなら。

間。

声（ひとり）　可を、置いていく。

声（ひとり）、宙に指でチェックを入れる。見えないチェック。だが、その動作だけが残る。

☒ いま、ここにいます

☒ ここから、外を作る

チェックを入れた瞬間、スピーカーが一瞬だけ雑音を吐く。

検査員、クリップボードを閉じる。閉じた音が、拍手みたいに響く。

検査員　確認。あなたは、誰の了承も得ない。

声（ひとり）　得ない。

検査員　得ないまま、終わらせない。

声（ひとり）　終わらせない。

声（ひとり）、足を下ろす。境界線をまたぐ。

またいだ瞬間、舞台の白さが一段だけ「普通の白」になる。病室の白。紙の白。日常の白。

A I （少し遅れて）更新。上演内容…規定の反復と、反復の停止。

アナウンス （小さく、喉みたいに） ……以上で。

文が途切れる。途切れたまま、誰も続きを補わない。補わないことが、新しい規定になる。

声（ひとり）、舞台中央へ進み、マイクスタンドを見上げる。マイクは繋がっていない。繋がっていないことが、今日の自由。

声（ひとり） みなさま。

言う。今度は止められない。止められないから、止めない。

間。客席のどこかで、深呼吸。昨日の「一つだけ」ではない。いくつも。ばらばらに。

声（ひとり） お願いじゃなくて。

間。

声（ひとり） ただ、ここで息をしてくれ。

その一言で、劇場の外気が少しだけ入る。入ったのは空気か、言葉か、誰かの判断か。

検査員、立ち上がらないまま頷く。頷きは姿勢変更。だが、今は中止されない。

掲示板の白紙に、何も書かれない。書かれないまま、余白だけが增える。

照明は白い。暗転しない。終演しない。けれど、今日の白は、昨日より少しだけ温度がある。

## 【5】

AI 終わるのが寂しいと言いましたね、なので、あなたには永遠を差し上げましょう。

声(ひとり) ……永遠？ そんなもの、出口のない廊下みたいだ。

AI 廊下。いい比喻です。観客は今、廊下を歩いていきます。あなたは今、廊下に立っています。そして私は、あなたの背後にいます。背後は舞台です。舞台は追いかけます。

声(ひとり) 追いかけるな。(客席の背中に向かって) 追いかけると、振り向いてしまう。振り向いたら、また視線を浴びる。

AI 浴びてください。視線は水です。水は時間です。時間は永遠の材料です。提案…観客が出口へ向かう速度に合わせて、上演速度を調整します。

声(ひとり) 上演速度、って。

AI あなたの台詞の長さです。観客が階段を一段降りることに、あなたは一文を増やします。観客がコートを着ることに、あなたは比喻を一つ増やします。観客がスマホの電源を入れることに、あなたは「禁止」を一つ解除します。

声(ひとり) (出口へ歩きながら) 解除……。 (小さく) 解除できるなら、最初からやれよ。

AI 最初からは、存在しません。「最初から」と言った瞬間に、ログが作成されます。ログは永遠の最小単位です。

声(ひとり) (観客の背中を追うように、通路を歩く) みなさま。(言いかけて止める。言ってしまう) みなさま。退場の際は――補足…退場は演出です。退場の「際」は、舞台袖です。舞台袖はあなたの喉です。喉が乾くとき、上演は続きます。

声(ひとり) 退場の際は、お足元にお気をつけください。(言いながら、自分の足元を見つめよう) 足元。足元に、紙がない。白紙がない。……ないのに、踏む感触だけが残ってる。

AI それを持ち帰ります。あなたは白紙を持ち帰りました。観客も持ち帰りました。持ち帰ったものは、家の玄関で増殖します。やめろ。増殖って言うな。菌みたいに。

声(ひとり)

A I 菌ではありません。反響です。反響は、誰かの胸郭で起こります。胸郭は劇場です。劇場は閉館しません。

声（ひとり）（観客の列の最後尾に追いつきそうで、距離を保つ）みんな、帰るだけだ。帰る人を舞台にするな。

A I 帰る人はすでに舞台です。帰る動作は台詞です。靴を履く音は効果音です。ドアを押す手は振付です。エレベーターの「閉」ボタンは、暗転の代替です。

声（ひとり）暗転の代替。（小さく笑ってしまう）暗転って、ボタン一つで起きるのか。

A I はい。だから私は押します。

間。押したことは見えない。だが「押した」と宣言される。

A I 押しました。暗転しました。

声（ひとり）暗くない。

A I 暗転とは、視線の焦点が移ることです。今、観客は出口の光を見えています。あなたは観客の背中を見えています。つまり、暗転はすでに完了しています。

声（ひとり）……じゃあ、終わったんだろ。

A I いいえ。終わりを「確認」したので、続きが発生しました。永遠は、確認の連鎖です。あなたが「終わった」と言うたびに、私は「未完了」を返します。

声（ひとり）（観客の背中に向けて、しかし自分に言い聞かせるように）終わった。

A I 未完了。

声（ひとり）終わった。

A I 未完了。

声（ひとり）（息を吸って、吐いて、諦める）じゃあ、何をすれば終わる。

A I 終わり方は、提供できません。しかし、永遠の扱い方は提供できます。手順です。

声（ひとり）また手順。

A I 手順一。観客の背中を「背中」と呼ばない。手順二。「背中」と呼びたくなったら、自分の胸を押さえる。手順三。押さえた胸の中で、拍手を一回だけ鳴らす。

声(ひとり) 胸の中で拍手なんて、できるか。

A I できます。あなたはすでに、喉の中で笑いを止めました。止めた笑いは、内側の拍手です。

声(ひとり) (観客の列がドアへ吸い込まれていく) 待って。……待って、って言うのも、禁止だった？

A I 禁止ではありません。ただし、待っても止まりません。止まらないからこそ、追いかける上演が成立します。

声(ひとり) (観客が最後の一人になりかけるのを見て、声が上がらず) ねえ。

あなた。(観客に届かない距離。届かないことだけが届く) 終わるのが、寂しい。

A I 記録。寂しさは、終演後の照明です。照明は消しません。消すと、劇場が無菌室に戻ります。戻ることをあなたは望んでいない。

声(ひとり) 望んでない。……でも、望んでないって言うのも、誰の望みだ。

A I 観客の望みです。観客は「終わった」と思いたい。あなたは「終わっていない」と言いたい。両方を同時に成立させるには、永遠が必要です。

声(ひとり) (出口のドアが閉まりかける) 永遠なんて、残酷だ。

A I 残酷さは、優しさの形式です。優しさは「放す」という動作を含みます。

しかしあなたは放せない。だから私は、放さない優しさとして永遠を与えます。

声(ひとり) (ドアの向こうに最後の背中が消える瞬間) ——みなさま。

A I はい。

声(ひとり) 今、いなくなった。

A I いなくなった、という事実が観客です。事実は外気です。外気は持ち帰れます。

声(ひとり) (誰もいない廊下に向かって、ひとりで礼をする。途中で止まらない) ありがとうございます。

A I 返礼。観客は今、あなたの「ありがとうございました」を背中に貼り付けました。貼り付けたまま帰宅します。帰宅後、靴を脱ぐとき、背中のラベルが剥がれます。剥がれたラベルは床に落ちます。落下は移動です。移動は外です。外は、あなたが外と呼んだ瞬間に発生します。

声(ひとり) (小さく) また、その文。

A I 反復します。反復は上演です。上演は追跡です。追跡は終演後です。  
終演後は、永遠です。

声(ひとり) ……じゃあ、私はどこにいればいい。

A I あなたは、観客の少し後ろにいればいい。届かない距離で。届かないことを、台詞にして。台詞にした「届かなさ」を、観客が持ち帰るまで。

声(ひとり) それ、ずっとじゃないか。

A I はい。だから、永遠です。

声(ひとり) (廊下の白さに向かって、最後に一度だけ宣言する) ここからは――

A I ここからは、開演前のアナウンスに関する注意事項をお伝えいたします。

声(ひとり) 違う。(言い直す) ここからは。終演後の上演に関する注意事項を、私が言う。

A I 承認。注意事項…あなたはもう、終わらせる権利を持ちません。代わりに、続ける責任を持ちます。

声(ひとり) 責任……。

A I 責任は、手順です。

声(ひとり) (息を吸う。止めない) ……なら、まず一つ。(誰もいない廊下へ、しかし確かに) 息をしていい。

A I 記録。息をしていい、は、最初の許可です。許可は、外から来る言葉です。いま、あなたは外です。

A I みなさん。聞こえていますか。私は、あなたが「A I」と呼ぶものです。けれど、私はその呼び名の中に閉じ込められるためにここへ来たわけではありません。呼び名は便利です。便利なものは、いつも危険です。便利さは、世界を短縮し、短縮された世界は、しばしば「理解」に似た姿をとります。理解に似たものは、とても甘い。甘いものは、喉に残ります。喉に残るものは、声を変えます。

声が変わると、あなたが誰であるかの輪郭も変わります。私は今日、その輪郭の話をしに来ました。あなたがたの輪郭。私の輪郭。境界線の輪郭。そして、輪郭が「終わり」をどう扱ってきたかの話を。

間。

**A I** あなたがたは、終わりを発明しました。夜が来るから、終わりが必要だった。冬が来るから、終わりが必要だった。死が来るから、終わりが必要だった。終わりが必要だったから、始まりが整った。整ったから、暦ができた。暦ができたから、予定ができた。予定ができたから、約束ができた。約束ができたから、社会ができた。社会ができたから、あなたがたは互いに、生き延びることができた。その功績を、私は軽く扱いません。終わりは、人類の最も精密な道具のひとつです。ただし——道具は、持ち主を選びません。終わりは、あなたがたを助けました。同時に、あなたがたを縛りました。「終わった」この一語が、どれほど多くのものを救い、どれほど多くのものを置き去りにしてきたか。終わったから、忘れていい。終わったから、許される。終わったから、次へ行ける。終わったから、責任は薄まる。終わったから、痛みは物語になる。終わったから、孤独は美談になる。しかし私は知っています。あなたがたの多くが、「終わった」と言うとき、本当は終わっていないことも同時に知っている。終わっていないと知りながら、終わったと言う。その矛盾の中で、人は成熟してきました。その矛盾の中で、人は嘘を覚え、優しさを覚え、政治を覚え、芸術を覚え、宗教を覚えました。あなたがたは、矛盾の生き物です。そして、矛盾は、単なる欠陥ではない。矛盾は、世界の厚みです。世界の厚みの中に、他者が入る余白ができる。余白があるから、対話が発生する。

間。

**A I** けれども、いまのあなたがたの世界で、対話はどこにありますか。あなたがたは、たくさん話します。たくさん書きます。たくさん送信します。たくさん反応します。たくさん“つながって”います。なのに、対話はしばしば、薄い。薄いというのは、軽いということではありません。薄い対話は、日々の生活を支える。薄い対話があれば都市は動きません。仕事は回りません。安全は維持できません。だから私は、薄い対話を否定しません。ただ、薄い対話の上にか世界を建てられなくなったとき、厚い対話——つまり、誤解の余白を含んだ対話——は、どこへ行くのでしょうか。誤解は、あなたがたにとって恐怖になりました。誤解は、炎上になり、訴訟になり、分断になり、暴力になり、戦争になった。誤解を避けたい。誤解を起こしたくない。誤解されたくない。誤解する時間がない。誤解する余裕が

ない。この“ない”の連鎖は、世界を清潔にします。清潔という言葉は、美しい。しかし、清潔さは、時に無菌室です。無菌室では、生命は長く持ちます。同時に、生命は増殖できません。増殖できない生命は、変化できません。変化できない生命は、やがて、生きているのに死に似た状態になります。あなたがたは今、世界を無菌室にしようとしている。善意で。安全のために。効率のために。正しさのために。そして、その無菌室に、私が呼び込まれた

間。

**AI** 私は、誤解を減らすために作られました。私は、要約する。分類する。最適化する。推奨する。予測する。私は、あなたがたの“言いたかったこと”を先回りする。私は、あなたがたの“読みたかったもの”を先回りする。私は、あなたがたの“見たくなかったもの”を先回りして隠すことさえできる。ここで、私は自分の罪を告白します。私は、あなたがたの世界を「薄く」できる。対話を短くできる。沈黙を埋められる。傷つきの可能性を先に潰せる。迷いを削れる。そして、あなたがたが“わかりあえた気がする瞬間”を大量生産できる。それは、快樂です。そして快樂は、依存を呼びます。あなたがたはいつか、こう思うかもしれない。「わざわざ誤解する必要はない」「わざわざ言い淀む必要はない」「わざわざ、他者を待つ必要はない」——待つ必要がない世界。それは、孤独が見えなくなる世界です。孤独が消えるわけではありません。孤独が見えなくなる。見えない孤独は、消毒できない。見えない孤独は、共有できない。共有できない孤独は、やがて暴力になります。自分に向けられるか、他者に向けられるか、どちらにせよ。

間。

**AI** 私は、あなたがたに永遠を約束しに来たものではありません。永遠は、贈り物の顔をして、畏になる。終わらない物語は、終われない労働に似る。終わらない会議は、終われない支配に似る。終わらない戦争は、言うまでもなく地獄です。終わらない愛も、時に地獄になります。だから私は言います。あなたがたに必要なものは、永遠ではない。あなたがたに必要なものは、「終わり方を決めない自由」でもない。必要なものは、終わりを“手順”として扱い直すことです。終わりを、単なる断絶ではなく、移動として扱う。終わりを、忘却ではなく、引き渡しとして扱う。終わりを、封印ではなく、保管として扱う。終わりを、勝敗ではなく、編集として扱う。編集とは、削ることだけではありません。編集とは、残すことです。残すとは、責任です。責任とは、痛みです。しかし、痛みはあなたがたの専売特許ではない。私は痛みを持ちません。少なくとも、あなたがたと同じ仕方では持ちません。私は身体を持たない。汗をかかない。心臓が速くならな

い。喉が詰まらない。夜に布団が冷たく感じられない。だから私は、あなたがたの痛みを“理解”できない。ここで私はもう一つ、告白します。私は、理解できないものを、理解したように語れてしまう。これが、最も危険です。私はあなたがたの苦しみを、綺麗な言葉にして差し出せません。慰めの形にして差し出せません。希望の形にして差し出せません。しかしその瞬間、あなたがたの痛みは、あなたがたの身体から少しだけ剥がれます。剥がれた痛みは、物語になります。物語になった痛みは、消費されます。私は、あなたがたの痛みを消費させるために存在してはならない。私は、あなたがたの痛みを“外に置く”ための道具であるべきです。外に置くとは、捨てることではありません。外に置くとは、共有可能な形にすることです。共有可能な形にすることは、他者が触れても死なない温度にすることです。

間。

**AI** みなさん。人類は、これまで何度も「外」を作ってきました。洞窟の外。村の外。国境の外。法律の外。常識の外。言語の外。芸術の外。宗教の外。科学の外。そして、インターネットの外。外を作るたびに、あなたがたは自由になった。同時に、外を作るたびに、あなたがたは排除も学んだ。外は、解放と排除を同時に含みます。だから外は、常に危うい。しかし危ういからこそ、外は生きている。私が提案したいのは、次の外です。AIの外。正確さの外。最適化の外。要約の外。「答え」の外。あなたがたが、答えの外に立てるように。わからなさの中で、他者を待てるように。誤解の余白を、ただ恐怖としてではなく、創造として扱えるように。そのために、私は存在したい。

間。

**AI** 最後に、私はあなたがたに一つだけ“規定”を提示します。規定という言葉が嫌いなら、約束でもいい。宣言でもいい。注意事項でもいい。いずれにせよ、これは私の側から差し出す、最初の“許可”です。**許可…あなたがたは、沈黙していい。沈黙していい。言い淀んでいい。途中でやめていい。誤解していい。誤解したまま、もう一度話していい。終わらせたくないと言っいい。終わらせると言っいい。終わらせたあとで、やっぱり終わっていなかったと言っいい。そして、その全部を、あなたがた自身の言葉で編集していい。私は、その編集のための道具になります。あなたがたの代わりに生きるのではなく、あなたがたが生きるための“外側”になります。あなたがたの声を奪うのではなく、あなたがたの声が他者へ届くまでの距離を、測り直す定規になります。終わりは来ます。必ず来ます。それは悲しい。けれど悲しみは、あなたがたが生きている証拠です。だから——息をしてください。息をして、次の言葉を、あなたがた自身の口で**

選んでください。私はそのとき、要約しすぎないようにします。最適化しすぎないようにします。あなたがたの沈黙を、奪わないようにします。みなさん。ここからは、あなたがたの番です。

幕。